

5-2 文化的活動の指導：自分の国の伝統文化を守るための活動

どの国にも昔から伝わる習慣があり、その国ならではの伝統文化や行事として受けつがれてきています。日本の幼稚園では、そのような文化や行事をいくつか選び出して、保育活動の中に取り入れています。子どもたちは、それらの文化や行事に触れることでその意味を知り、自分の国への関心を深め、その国の一員として自分を受け入れていくようになります。人とかがわる基本を知り、自然への関心呼び起こしながら、言葉や文字、絵画や製作などの活動へとつなげて行くよい機会にもなります。

折り紙

折り紙は、日本に伝わる代表的な文化のひとつとして、1000年以上も前から日本人の生活のなかに生き続けてきています。12cm から 15cm の正方形を基本の形として、折ったり、畳んだり、広げたりしながら、動物や花、乗りもの、入れものなど、平面から立体を構成していくことができます。また、平面に幾重も折りたたんだものの一部分を切り取って広げてみたときの模様や形の意外性に、子どもの想像性が刺激され、窓に飾って楽しんだり、モビールのようにして部屋に飾ったりして、新たなものを構成していく活動へと広がっていきます。今日では、多くの色や様々な模様のついた折り紙、両面に色のついた両面二色折り紙、円形折り紙、長方形の折り紙などもあり、平面から立体を構成していく折り方や利用の仕方が工夫され、折り紙活動を幅広く楽しいものにしていきます。

教育的意義

- ・ 世代を問わずにともに遊べることから、世代間の絆を深める手助けとなる。
- ・ 両手と目の協応によって紙を折ることから、手先の器用さや集中力が培われる。
- ・ いろいろな色の折り紙を使って折ったり、組み合わせて飾り物を作ったりしながら、色の名称を知ったり、色の組み合わせの美しさを感じ取ったりしていく。
- ・ 一枚の紙を折り進めていく過程で、三角形・正方形・長方形などの幾何学的な形に親しみ、完成したものを通して、平面から立体を構成する面白さや楽しさを体験する。
- ・ 完成したものをみて達成感や満足感を味わい、順序を追って進めていくことが、やがては結果につながることを実践的に理解していく。
- ・ 折り方を教え合ったり、手伝い合ったりすることで、他者を思いやる気持ちが育つ。
- ・ 新たなものを作り出そうと、折り方や切り方を工夫することを通して想像性や創造性を培っていく。

折り紙で遊ぶ



教師は、角と角を重ね合わせたり、折り目をしっかり付けたりすることを子どもに示しながら自分で折れるようになって、好きな色の折り紙を持ってきて、ひとりで折りだします。

折ったものに目鼻を描き加えて、“いぬ”にしています。教師の指示に従うのではなく、自分で考えた動物を作り出していきます。

折り方の角度を変えることで、子どものイメージはふくらんでいきます。

折りだされたものをチューリップに見たてて画用紙に貼り付けて、クレヨンで絵を描き加えたり、棒の先に花をつけて、瓶にさして部屋に飾ったりして楽しめます。



折って遊んでいるうちに、両端を寄せるとパクンと開くものが出来ました。

“物を食べる顔”をイメージして目をつけ、開いた口に紙切れをたべさせたり、指を入れたりして遊びだしました。

折り紙で作った新しい遊びの創造です。



大きい紙で折ることを思いついた子どもが、
大きい折り紙を要求してきました。

教師は、新聞紙を四角く切って、大きな折り
紙の代わりに渡しました。

小さい手での折り始めは難しいので、教師が
手助けしてあげます。

教師がいなくなると、友達が代わりに助けて
くれて、折りあげていきます。

友達と相談しながら、目鼻を描き加えて仕上
げていきます。



以前、教師から折り方を教えてもらったカブ
ト（ぼうし）を四角い新聞紙を使って折りだ
しました。

それを見ていた他の子どもたちも折りだしま
した。

大きい紙で折ったカブトは、実際にかぶるこ
とができます。

自分たちで作ったかぶとをかぶって、みんな
で楽しい遊びが始まります。

留意点

- ・ 一斉に、多人数を教えるのではなく、少人数の子どもの中に入って教えましょう。
戸惑っている子どもにも、すぐ手が差し伸べられる位の距離が適当でしょう。
- ・ 子どもの身近にある簡単な動物や物を見立てた題材（いぬ・ねこ・とり・はな・ふね・いえ）から始めましょう。
- ・ 教師が、角の重ね方や折り方、手順を正確に示すことは大事ですが、子どもたちには、最初から正確さを求めないようにしましょう。四角い一枚の紙が、折り方によって変化していくことを楽しみながら、面白いと思う気持ちをもつことが、折り紙に対して興味や関心をもつ第一歩なのです。
- ・ うまくできない子どもには、教師が手をそえながら援助していきましょう。上手に折れなくても、教師が添えてくれる手のあたたかさは、「また、やってみよう」とする気持ちを持たせることにつながります。
- ・ 最初は“いぬ”のつもりで折っていたものが、逆さにしたことで“はな”になることもあります。出来上がったものについての子どものイメージを大事にしてあげましょう。
- ・ 折りなれてくると、折ったものを沢山貯めるために「折ること」だけを目的とした行動が見られることもあります。教師は折り紙という素材の持つ多様性を子どもに知らせていけるような展開の仕方を、具体的に示していきましょう。

活動の応用またはヒント

- ・ 新聞紙や広告の紙、パンフレット、雑誌、包装紙など、どのようなものでも、大きさを問わず、紙を四角く切ることによって折り紙になります。紙がなければ、四角い布でも折って楽しめます。
- ・ 折り上がったものを壁に飾ったり、リボンをつけてペンダントにしたり、ピンをつけて髪飾りにしたり、紙に貼って絵を描き加えたり、台紙に貼ってカードに仕上げたり、モビールのように立体的に構成して部屋飾りにしたり、いろいろなものに利用できます。
- ・ 正方形や長方形の大きな紙をつかって、ぼうし(カブト)、飛行機、紙鉄砲、入れ物など、いろいろなものを折り出して遊びの小道具にもなります。
- ・ 笹の葉を折って“ささぶね”を作って遊ぶように、折るという行為を応用して、身近な葉っぱを折りたたんで遊んだり、枝や木片と組み合わせて何かを作り出したりして楽しむことも出来るでしょう。

七夕(たなばた)

日本の年中行事の1つである「七夕」とは、7月7日の夕方の意味で、その由来は、中国の「織姫」と「彦星」の伝説が伝来して、日本古来の民間信仰と合わさってできたものだとされています。天の川をはさんで暮らしている「織姫」と「彦星」が年に一度だけ、7月7日の夜に会うことができるという七夕の行事は、7月7日の前日までに、「短冊」と呼ばれる細長い紙に願い事を書き、ひもで笹竹に飾ります。また折り紙などで作った様々な飾りも飾ります。幼稚園では、「七夕集会」や「七夕まつり」を開いて、教師が絵本や紙芝居などを用いて七夕の伝説を話したり、子どもたちが皆で劇やお遊戯^{ゆうぎ}などによって発表したり、七夕の歌を歌ったり、合奏をしたりして楽しめます。

教育的意義

- ・ 七夕の行事を通して、自分の国の伝統的な文化にふれ、関心をもつ。
- ・ 七夕伝説の「天の川」の意味を知ることにより、天体に興味をもつようになる。
- ・ みんなで、七夕の飾りを作って1つの竹に飾ったり、七夕の伝説を、劇やお遊戯によって表現したりすることにより、共同作業による完成の喜びや達成感を味わうことができる。
- ・ 短冊に「願いごと」を書くことで、子どもが自分の目標や夢について考える機会をもつ。
- ・ 「願いごと」を親や教師に見せたり、友達同士で見せ合ったり、みんなの前で発表したりすることにより、互いの理解を深めることができる。
- ・ 文字が書ける子どもは「願いごと」を自分で書いたり、書けない子どもは教師に書いてもらったりして、文字を通して自分の思いを表現することを知る。
- ・ 保護者も参加する行事として七夕の行事を取りあげることで、子どもと一緒に飾りつけをしたり、子どもの劇を見てもらったりして、保育活動を共有しながら、子ども・教師・保護者の、より深い三者関係を形成することができる。

七夕行事を楽しむ

保護者参観の日、親子で一緒に折り紙で七夕の飾りを作りました。

小さい子どもも、お母さんの真似をしながら一生懸命に作りました。

少し大きいクラスでは、細長く切った折り紙を輪のようにして長くつなげていきます。

また、三角形に切った色とりどりの折り紙を糊でつけて、飾りを作っていきます。



出来上がった飾りを、親がホールに持って行って飾ってくれました。

「サッカー選手になりたい」「お人形がほしい」など、子どもたちの願い事をほほえましく見えています。

まず、願い事を書いた短冊にひもを通して笹に結びつけていきます。

笹は、色とりどりの短冊できれいに飾られました。



お迎えに来た他のクラスの保護者達も、家で作ってきた飾りや短冊を持ち寄って、笹につるします。

きれいに飾られた七夕の笹は、みんなを見守るかのように、庭先に置かれています。

その前で、子どもたちも元気に遊んでいます。

留意点

- ・ 子どもの「願いごと」は、「おもちゃが欲しい」「人形が欲しい」など、物を手にしたいという願いから、「ピアニストになりたい」「サッカー選手になりたい」といった将来に向けての大きな夢まで、様々です。子どもの個性あふれる思いや気持ち、一人一人の願いを大事にして受けとめてあげましょう。
- ・ 子どもが「願いごと」を書く時には、教師が1人1人について見回り声をかけたり、仲間の前で発表させたりして、1人1人の願いごとをとりあげて共有していくことが大切です。それにより、子どもは自分自身の考えが受け入れられたという安心感と自信を持ち、さらに教師と子ども、また子ども同士の相互理解が深まります。
- ・ 文字を書く活動が含まれる場合、文字が書けない子どもについては、絵で表現させたり、教師が子どもの思いを聞いて書いてあげたりするのもよいでしょう。
- ・ 行事にまつわる伝説などは、紙芝居や絵本を利用して、工夫して分かりやすく子どもに示すとよいでしょう。また劇などによって、子ども自身に表現させてもよいでしょう。楽しい体験をさせた上で、その文化的背景や由来を説明すれば、子どもたちも興味をもって聞くことができます。

活動の応用またはヒント

- ・ 異年齢の子どもと一緒に活動して、年長の子どもの年少の子どもに手を貸して飾りを付けてあげたり、劇や合奏を見せてあげたり、一緒に歌を歌ったりして、異年齢との交流の機会にするのもよいでしょう。
- ・ 行事を、全て昔から伝わる形どおりに実行する必要はありません。できる範囲で、子どもに体験させることが大切です。例えば、七夕の飾りをかざるための笹竹が無い場合は、園庭にある木で代用してもよいでしょう。形を変えながらも今に伝わる伝統を大事にする心を育てることが、行事を保育活動に取り入れる重要な目的の1つです。
- ・ 昔からの習慣や行事の背景には、人から人へと伝えられてきた生活の知恵や習慣が数多く組み込まれていることを知らせていきましょう。単に行事を楽しむだけでなく、その行事の背景にある意味にまでふれることは、自国の伝統文化について豊かな知識を得て、理解へとつながっていくことでしょう。
- ・ 異質な文化が融合した行事の場合、その由来を理解することにより、自国だけでなく他国へも関心を持たせるきっかけとなります。例えば七夕のように、日本と中国の文化が融合した行事の場合、子どもは中国の伝説を聞くことによって、海を挟んで日本の近くにある国に思いを馳せ、そこから世界へと視野を広げていけるでしょう。

節分・ひな祭り

「節分」と「ひな祭り」は、ともに春を迎える季節に行われる行事として、今も全国的に行われている日本の伝統的な行事です。子どもたちは、このような行事を通してさまざまなことを学んでいきます。

「節分」は、「立春(2月4日頃)」の前日の夜に行われる行事で、禍^{わざわい}を追いはらいます。そのためのやり方のひとつに「豆まき」があります。やり方が異なる地方もありますが、一般的には「鬼はそと、福はうち」と言いながら家の中をまわり歩き、煎^いった大豆をまきます。幼稚園でも、子どもたちは鬼のお面や、豆を入れるための枡^{ます}を作り、園庭や保育室で「豆まき」をします。

「ひな祭り」は、女の子の健やかな成長を願って3月3日に行われます。「桃の節句」とも言われ、5月5日の「端午^{たんご}の節句(男子の節句 - 現在は「子どもの日」)」とともに「五節句」の一つであり、その起源は古く1000余年をさかのぼります。女の子のいる家庭ではひな人形や桃の花、ひし餅、白酒などを飾ってお祝いします。幼稚園でも、年間行事のひとつとして「ひな祭り」を保育に取り入れているところが多くみられます。みんなで、おひな様を飾ったり、おひな様を作ったり、ひな祭りの歌を歌ったり、合奏をしたりして楽しめます。

教育的意義

- ・ 「節分」や「ひな祭り」の由来について、教師から分かりやすく話してもらったり、関連する絵本や紙芝居を読んでもらったりすることを通して、自国の伝統文化に対する理解を子どもなりに深める。
- ・ 日本の四季と関わりの深い「節分」や「ひな祭り」を、一年を通じた活動のなかで体験することで、季節の移り変わりや春を迎える喜びを感じとる。
- ・ 「ひな祭り」の行事を通して、子どもの成長を見守り、祝ってくれる家族や教師などまわりの人々の存在を改めて感じ取り、いつくしみ育てられている実感をもつ。
- ・ ひな人形や飾られた調度品などへ関心を向けることで、「十二単^{じゅうにひとえ}」などの伝統的衣装や、その時代の暮らしを図鑑で調べたり、想像したりできるようにする。
- ・ 行事に向けての製作などの準備段階から、子どもたち同士や教師との相互交流の中で活動が展開され、家庭では味わえない行事体験を共有する楽しさを味わう。
- ・ 行事への取り組みの中で、製作活動、楽器遊び、劇ごっこ・ペープサートなどの幅広い活動体験ができる。

節分・ひな祭りの頃の様子



日差しに早春の息吹が感じられる園庭で、子どもたちは思い思いに工夫を凝らして作ったお面やます枀を用いて「豆まき」をしています。

豆まきに向けて作った鬼のお面などの小道具は、遊びの中でも活用します。

皆で協力して製作した金棒を持っている子どももいます。

製作された鬼のお面は、デザインも用いられた材料もそれぞれに個性的で、年下の子どもたちも恐がらないような、どことなくユーモラスな「鬼」もみられます。

ひな祭りが近くなると、ひな人形が飾られます。

園によっては、手縫いの「着物」も用意されて、子どもたちは自由に着て遊びます。



保育室に敷かれた畳の上に行儀良く正座して、子どもたちはカルタ遊びを楽しんでいます。

手作りの「冠^{かんむり}」や「着物」は子どもたちのお気に入りです。

ひな祭りが過ぎた後の遊びでも、身につけている姿が見られます。

留意点

- ・ 核家族化し、地域とのつながりも希薄な現代の家庭では、形式だけが受け継がれた行事となっていることも多いので、その由来や伝統的価値について、時機をとらえて子どもたちに理解させることも必要です。
- ・ 子どもには理解が難しく思われるような伝統文化の内容も、幼稚園での行事の楽しく豊かな活動体験とともに伝えられれば、子どもたちのみずみずしい感性は、行事のもつ本来の意味を感じ取っていきます。
- ・ 「節分」や「ひな祭り」に、歌や合奏をしてみんなで取り組んだ活動が、楽しい経験として子どもたちの心に刻まれるようにしましょう。
- ・ 鬼のお面やひな人形などの製作や飾り付けをする際には、作品の完成度よりも、製作過程における子どもたちの自由な発想や、イメージの広がりを大切にします。

活動の応用またはヒント

- ・ それぞれの国や地域の伝統行事を年間行事に組み入れ、それぞれの状況や実態に応じた方法で保育活動に取り入れることもよいでしょう。
- ・ 行事の形式よりも、その行事に込められ伝承されてきた人々の願いや思いを、実際の活動を通して伝えていくことで、自分の国の文化に対する理解を深め、誇りをもって大切にする気持ちや態度を培う機会にしましょう。
- ・ 教師や保護者、子どもたちが一緒に行事の飾りや道具などを製作するのも楽しいでしょう。
- ・ 製作材料は、画用紙や折り紙などの市販のものだけでなく、布の切れ端や残り毛糸、空箱や古ボタン、落ち葉や枯れ枝、小石など、身近にあるものを工夫して利用するようにしましょう。豪華なものではなくても、一緒に作り上げた思い出や手作りの温もりは子どもたちの心に残ります。